



今や、オケマンになりたい  
という願望は確固たるもの、  
目標はドイツのSクラスの  
オケに入ることです。

「神戸」から7年、バーゼルでさらに研鑽中の小山さんの現在。

日本人で初めて神戸国際フルートコンクールに優勝し、その後は慶應義塾大学に進学。一時は演奏家と研究者の二足のわらじを履く将来を語ることもあった小山さんは、現在、スイスのバーゼル音楽院でフェリックス・レングリに学びながら充実した音楽生活を送っている。

取材・構成：秋山君彦 ラポート奏者 撮影：岡崎正人

——神戸国際コンクール入賞直後の小誌のインタビュー（2005年11月号）では、将来は数学者になりたいとおっしゃっていましたか。

小山 もうやめました（笑）。慶応大学を卒業した後、スイスのバーゼル音楽院に入學して、今年目に入ったところです。

——慶応では理工学部の管理工学科でいらっしやいましたね。

小山 はい。管理工学科というのは、広く浅くの分野で、経済・金融全般まで及

び、会社経営なども学びました。

卒論は、自動作曲プログラムに関するもので、バッハのコラールの和音進行を調べ、確率を割り出してシステムを作りました。まあ、学部レベルなので大したものではないんですが、出来上がった曲は一応バッハのコラールらしいというのがシメです（笑）。

——バーゼルでフェリックス・レングリに師事することになったきっかけは？

小山 最初にムラマツのフルート・キャ

ンプでレッスンを受けた時、ピエール・ブーレーズのソナチネをみてもらいま

した。レングリはあの曲をとて細かく説明してくれ、アプローチのアイデアも豊富でした。その後、ウィーンのパイヤーバッハの講習会で習った時には、フレージング、音作り、アーティキュレーション、どれをとってもさらに高度な視点からの要求で、とにかくその引き出しの多さに圧倒されました。それで、もう彼しかないと決めたわけです。

エクササイズ。こうすることによって、アパチュア周辺の筋肉が締まり、喉の奥は開くというわけです。

あとは口腔内の空間を自在に使えるようにするために、循環呼吸のマスターも必須です。口を開けるといっても、開けすぎると息の束のコントロールができなくなるので、私としてはフランス語の鼻母音を楽に発音できるくらいが、ちょうど良いと思います。また、この三つか四つの鼻母音の使い分けにより、ほんのちよっとしたことでも音色も変わります。ち

レングリは、同年代の例えば天才型のフィリップ・ベルノルドと比べると、明らかに努力型。そしてエマニュエル・パユと同じように独・仏・英・伊・スペイン・ポルトガルの6か国語を操ります。しかも身体を動かすことも大好きで、もうバイアリティーが違います。運動に関してはちょっと行き過ぎというか、例えばこのあいだはバーゼルの街を自転車で猛スピードで走り、転倒して骨折。手術をして2週間も楽器を吹けなかったそうですが、全然平気みたいです（笑）。

第3オクターブの音を  
もっと研ぎ澄ましたい

——音楽院でのレングリのレッスンは？

小山 今、自分の奏法における当面の課題は、第3オクターブの音をもっと研ぎ澄ますことと、タンギングの表情を増やすこと。高音域のトレーニングでレングリが薦めているのは、男性の場合には、実際に出てくる音より2オクターブ、あるいは3オクターブ低い音を同時に歌う

とにかくその引き出しの多さに圧倒されて、  
もうレングリしかいないと……

フルート奏者

# 小山 幾裕

こやま・ゆきひろ

Profile  
1986年生まれ。第53回全日本学生音楽コンクール全国大会フルート部門中学の部1位。第56回全日本学生音楽コンクール全国大会フルート部門高校の部1位。第7回びわ湖国際フルートコンクール高校生部門1位。第73回日本音楽コンクール1位、岩谷賞（オーディエンス賞）ほか受賞。第6回神戸国際フルートコンクール1位。ソロリサイタルのほか主要オーケストラとも数多く共演。これまで三上明子、ヴォルフガング・シュルツ、パウル・マイゼン、堀井恵、ハンスゲオルグ・シュマイザー、オーレル・ニコレの各氏に師事。第17回出光音楽賞。2010年慶應義塾大学理工学部を卒業。現在バーゼル音楽院でフェリックス・レングリ教授に師事。